大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

# ドフトエフスキーとカント（一）：宗教思想と哲学との一接点



| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2010-04-19<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 福島, 正彦<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://doi.org/10.24729/00004710 |

# ドストエフスキーとカント（一）

## ――宗教思想と哲学との一接点――

福島正彦

### 序

『ドストエフスキーとカント』[1]という、一ロシア人の手になる小冊子が出版されてから既にかなりの歳月が経っている。一九七二年の末月には、この書の著者ゴロソフケルの簡単な略伝を添えた最初の内容紹介が、我が国の或る雑誌に載せられた。[2] 筆者もまた、それから幾年か過ぎてのちであるが、「ドストエフスキーとカント」という小見出しを付して、両者の関連性について言及する機会があった。[3] したがって、このロシアの作家とドイツの哲学者とを並べて論じることは、今日もはや決して目新しい試みとはいえない。

しかし、新奇さは既に失なっているとしても、このゴロソフケルの興味ある研究内容を更に詳細に紹介し、宗教思想と哲学との一つの接点を探るという課題は、今もわれわれに残されている。なぜなら、この研究の秀れた独自性にもかかわらず、前記の内容紹介は雑誌面一頁に充たない非常に簡単なものであり、かつての筆者自身の言及も、執筆に提供された限られた紙数の関係上、数頁内に圧縮され、勢いごく部分的な紹介にとどまらざるをえなかったからである。

カントとドストエフスキー、この両者に一体どんな関連性があるのか。前者は十八世紀に思索を深め、理性の自律と人格の尊厳を説いた冷静で批判的なドイツの哲学者であり、後者は病気と情念に苦しみ、現代の無神論的傾向を察知して「懐疑の煉獄」を通過したが、究極においてはキリストによる救済の可能性を信じた十九世紀ロシアの作家である。哲学と文学、理性と情念、批判と信仰、自律と救済、これら互いに領域ないし働きを異にするものをそれぞれ強

力に代表しているのが、この両者ではないのか。一体どこに両者が触れ合う接点があるのだろうか。

ゴロソフケルの著書は、「長篇小説『カラマーゾフの兄弟』とカントの論著『純粋理性批判』についての読者の思索」という副題が付けられている。この副題が示すように、著者は、ドストエフスキー文学の頂点ともいうべき最後の大作と、カントの批判期を代表する主著とを基本的な文献として取り上げ、この両者の触れ合う接点を探ろうと試みている。ゴロソフケルによれば、神と魂の不死とを否認し、神も不死もなければ『何をしても構わない』[4]（4,178）として父親殺害を教唆したイヴァン・カラマーゾフは、「カント的な二律背反の弁証論的主人公」（ctp. 34）であり、夢の中でイヴァンにささやく悪魔、その教唆を物理的に実行したスメルジャコフなどは、「カント的な二律背反のアンチテーゼの肉化」（ctp. 42）である。倫理的に裁かるべきものは、イヴァン個人ではなく、物質的な世界を唯一無限の世界とみなし、不可分の精神的な単純体（不滅の魂）、超越論的自由、絶対的存在（神）の三つの理念を否定する反定立の側の無神論的独断、思弁的倨傲である。ゴロソフケルによれば、読者の法廷に現われるのは本来イヴァンではなく、まさにカントが指摘する二律背反のアンチテーゼであり、これがドストエフスキーによって断固として倫理的に有罪の宣告を受けるのである。

このゴロソフケルの見解は、カントの『純粋理性批判』弁証論中の純粋理性の二律背反の章[5]を、『カラマーゾフの兄弟』が提起している倫理的・宗教的問題と関連づけたものである。著者がカントを考察する目は、ひたすらこの批判的主著に向けられている。ドストエフスキー自身が、ペトラシェフスキー事件に連座して、シベリヤ流刑に処せられた時、兄ミハイルに宛てた書簡の中で送付を懇請した数冊の書物の内に『純粋理性批判』を含めている（一八五四年二月二十二日付オムスク発）。ただし、その書簡の中では、なぜ特にカントのこの著書を読みたいのか、理由は何も記されていない。また、この書を実際に入手して読んだのかどうかも確認できないのであるが、銃殺刑の宣告を受けて少なくとも一旦は死を覚悟し、シベリヤ流刑地において自己と他者との赤裸々な姿を冷厳に見つめてきたドストエフスキーが、獄中に持ち込むことを許された唯一の書物『聖書』と共に、神、自由、不死について真剣に思索するカントのこの書物を繙くことを欲していたことだけは確かであろう。

書簡に記されるドストエフスキー自身のカント言及という、この実証的事実にゴロソフケルは注目し、作家の作品と哲学者の著書との内面的・思想的関連性を追求するのである。ゴロソフケルによれば、『カラマーゾフの兄弟』の中に、カントの『純粋理性批判』との関連性に対する「暗示」（намёк）が与えられている（ctp. 97）。彼は次のように述べている「ドストエフスキーは《純粋理性批判》の背反論を知っていたのみならず、それを熟考したのである。それ

どころか、幾分かそれに順応しながら、彼は長篇小説の様々な劇的状況の中で自分の論証を展開したのである。」（CTP. 38）。

カントとドストエフスキーとの間に、このような内面的・思想的関連性を追求するゴロソフケルの試みが成功しているとすれば、それはカントの哲学の理解のために一つの新しい光を当てるもの、新しいアプローチの方法を提供するもの、ということができるだろう。それは、ともすれば無味乾燥な概念的操作としてのみとらえられ、専門家以外には理解できない難解な営みのように誤解され勝ちな哲学的思考を、誰にも親しまれ理解されうる日常的な言葉と具体的なイメージによって、万人の心に訴える開かれた文学の場の中へもちきたす貴重な試みであるともいえるだろう。

『カラマーゾフの兄弟』と『純粋理性批判』とがゴロソフケルの取り上げる最も基本的な文献であることは、既に述べた通りである。われわれも同様にこの両書を考察の対象とし、方法としては彼が開拓した道を辿り、彼の著作をできるだけ客観的に紹介しつつ、これとカント自身の見解とをつき合わすことによって、ドストエフスキーの宗教思想とカントの哲学との一つの接点を示すこと――これが本稿の課題である。

## 一

ゴロソフケルは先ず、『カラマーゾフの兄弟』の読者にとって既知のものとして、次の事態を挙げている（CTP. 5）。

一、カラマーゾフ老人の殺害現場やその他の外面的状況を考慮して下された法律上の「人の裁きによって」は、老人の長子ドミトリーが父親殺害の有罪宣告を受けたこと。

二、しかし、内面的な良心の裁きとして現われる「神の裁きによって」は、次男のイヴァンが殺害者の宣告を受けたこと、ところが実際は、イヴァンはこの出来事を予測したけれども、彼自身は決して殺害しなかったこと。

三、実際に殺害したいわば「物理的な殺害者」は、老人の庶出子スメルヂャコフであり、彼は後に自らを裁き自殺したこと。

四、ところがこの物理的な殺害者スメルヂャコフは、ただあたかも殺人の罪があるかのように描かれているだけであって、スメルヂャコフ自身は、自分を「本当の殺人者」とは認めず、イヴァンこそそれだと主張していること。

五、これに反して、老人の三男アリョーシャは、イヴァンを決して殺人者であるとは考えず、またドミトリーに対しても一点の嫌疑も抱いていないこと、アリョーシャはただスメルヂャコフのみを殺

人者とみなしていること。

六、ドミトリーも最初はスメルヂャコフへの嫌疑を否認していたが、その後、心ならずもアリョーシャと同じ結論に達すること。

七、イヴァンは長い間ドミトリーへの容疑を認めていたが、殺害者は自分だというスメルヂャコフの告白を聞いた時、半狂乱の状態に陥って、殺害者は他ならぬイヴァン自身であると述べるにいたること。

一体カラマーゾフ老人を殺害した真犯人は誰なのか。この問いは、われわれ読者の心を惹きつけようとする推理小説風の一つの謎かけであり、われわれをサスペンスと緊張した困惑状態に追い込むものであるが、実は作品中の主人公たちの全てが同一の謎のために苦しんでいることが、右に記された錯綜した事態を通して明らかにされる。ドストエフスキー自身は一体、誰を真犯人とみなしているのであろうか。

ゴロソフケルによれば、この問いに対して作家が与える答えは、次のように全く「奇妙な思いも寄らぬ解りにくいもの」である。—「誰がって、そりゃ悪魔だ、悪魔が殺したのだ。悪魔であってスメルヂャコフではない、悪魔であってドミトリーではない、悪魔であってイヴァンではない！」(стр. 6)。

「悪魔」(чёрт) の名を聞いてわれわれ読者は、何と馬鹿々々しい下らぬことだ！と憤慨してはならない。作家は仮空の魔物や道化者を登場させて読者をからかっているのではない。「悪魔」は、ゴロソフケルによれば、「長篇小説の他の主人公たちと並んで主人公の一人」なのである。それは空想上の魔物や馬鹿げたひょうきん者としてでなく、現実にドミトリーを陥し入れ、イヴァンにとっては対話の相手として「如実に」現われ、そこでは「実際に」一人の登場人物としての役割を演じるのである (стр. 7)。

ゴロソフケルは、この「悪魔」が舞台の上でどのように登場してくるかを作品に即して具体的に跡づけた後に、本当の殺人者は差し当り「スメルヂャコフと悪魔」の二人であるが、しかしスメルヂャコフが不可視の「悪魔」を代役し、思想的にはこれと同一であると解釈できるとみなし、「究極においては、ただ悪魔のみが唯一の殺人者であることが示されるだろう」と記している (стр. 16)。すなわち、スメルヂャコフは「事実的な、いわば《物質的な》殺人者」であるが、「彼の象徴的な殺人者」である「悪魔」を代役しているのであるから (стр. 23)、「著者の見解に従えば、悪魔以外の何者もフョードル・パヴロヴィチ・カラマーゾフ殺害の唯一の罪人として現われない」(стр. 24) というのである。

スメルヂャコフが「悪魔」の代役俳優であり、思想的に「悪魔」と同一である、というこのゴロソフケルの解釈は、作品の綿密な分析に基づいており、彼はこの結論を非常に「説得力のあるもの

だ」（стр. 20）と自負している。次にその詳細な跡づけを見ておきたい。

先ず、イヴァンが自分自身から分離することができず、常に自分につきまとうものとして、スメルヂャコフと「悪魔」とは共通性をもっていることが指摘される。「もし下手人がドミートリイでなくって、スメルヂャコフだとすれば、僕もあいつと連帯なんです。」（4,117）。――この言葉は、イヴァンがドミトリーの許嫁カチェリーナに語ったものであるが、同じ意味のことを、彼は法廷において彼らの前で繰り返している。「親父を殺したのはあいつです、兄貴じゃありません。あいつが殺したんです。」（4,242）。ここで「あいつ」とは、いうまでもなくスメルヂャコフを指すが、この発言の直後でイヴァンは、自分が正気であり、しかも殺人者であることを告白するのである（4,243）。

このように、イヴァンは殺人者としてのスメルヂャコフと自己との連帯性を認めているのであるが、同様に「悪魔」と自己との内面的一体性についても繰り返し語っている。「お前は僕だ、ただ顔つきの違う僕自身だ。お前は僕の考えていることをいってるんだ……。」（4,156）と「悪魔」に向って語り、弟アリョーシャに「あいつはね、僕なんだよ、アリョーシャ、僕自身なのさ。」（4,184）と述べている。

この連帯性ないし一体性という共通点は、スメルヂャコフおよび「悪魔」の側からも指摘されている。スメルヂャコフは、「お前は一人で殺したのかい？」というイヴァンの問いに対して、「ただあなたと一しょにしただけです。あなたと一しょに殺しただけです。」（4,131）と答え、「悪魔」はイヴァンに向って、「もし僕の思想が、君の思想と一致しているとすれば、それはただただ僕の名誉になるばかりだ。」（4,156）、「もしお望みなら、僕も君と同じ哲学を奉じてもいいさ。それが一ばん公平だろう。」（4,165）と皮肉な口調で語っている。

「悪魔」は、イヴァンの悪夢の中で、「幻」（призрак）として現われるが――「お前は幻だ。」（4,155）――、スメルジャコフも、イヴァンにとって、あたかも同じ「幻」であるかのように思われる。イヴァンはスメルヂャコフの自白を聞いた時、「俺はお前が夢じゃないかと思って恐ろしいんだ、俺の前に坐っているのは幻じゃないか？」（4,129）とつぶやいている。この悪夢の中に現われる「悪魔」＝「幻」と、スメルヂャコフという「幻」とが、共にイヴァンを苦しめ嘲弄し続けるのである。

スメルヂャコフは、以前イヴァンには、全く取るに足らぬ「愚か者」と思われていた。ところが、この愚か者があたかも「幻」であるかのようにイヴァンの眼前に現われるようになった時、思いもよらず実に「利口」であることが判明する。スメルヂャコフのアリバイ作りの狡猾さを知ったイヴァンは、「悪魔」がスメルヂャコフを

助けたのだと叫ぶが、その直後、スメルヂャコフ自身が「思ったよりよっぽど利口な男」であることを認めるのである（4,143）。勿論、「悪魔」もこの下僕と同様に「利口」である。イヴァンにどれほど愚か者だと罵倒されようとも、「悪魔」は決してひるまない。逆に「Satan sum et nihil humanum a me alienum puto.」（わたしは悪魔である、だから人間的なものは何もわたしにとって無関係なものはない）とラテン語をあやつって皮肉なシャレをとばし、イヴァンをして「これは悪魔の言葉としちゃ気が利いてるな！」（4,159）と驚嘆の語を発せしめる程なのである。

イヴァンが「悪魔」に与えた「気が利いてる」（негдупо）という言葉は、彼が狡猾なスメルヂャコフを「利口だ」（негдупо）と認めた表現と、意味は全く同一である。それは、ペダンチックな思弁的冗舌と皮肉に長じ、陰険で狡猾な手段を弄する世俗的才智を指している。この意味の「利口さ」がスメルヂャコフと「悪魔」との共通性であり、これが両者の忌わしい卑劣な行為に手助けをおこなうのである。この卑劣さに対する深い憎悪から、イヴァンは両者に対して殺意まで感じている。「スメルヂャコフを殺さなけりゃならん！ 今もしスメルヂャコフを殺す勇気がなければ、俺は生きている価値はない！……」（4,117）。これはイヴァンの内心の想念であるが、「悪魔」に向っては、その思弁的冗舌に対して、「黙れ、黙らないと殺すぞ！」と威嚇している。

「悪魔」とスメルヂャコフは共にイヴァンにとって耐え難く卑劣な「下僕」（лакей）である。「悪魔」の冗舌が長老ゾシマの許で修業している純朴なアリョーシャにまで及んだ時、イヴァンはこらえ切れずに、「アリョーシャのことはいってくれるな…下司（лакей）のくせに何を生意気な！」（4,156）と述べ、スメルヂャコフについては、「あの下男（лакей）が憎くて憎くて堪らない、この世にまたとないほどの重い侮辱を自分に加えた人間のような気がする」（2,132）といっている。

このように、ゴロソフケルは「悪魔」とスメルヂャコフとの一致点を指摘し、スメルヂャコフが生存中は「悪魔」はただ暗示的に、名前なき或る「彼」として、読者の眼前にちらついているだけであるが、スメルヂャコフの死後には彼の代役俳優として如実に舞台上に現われるのである（стр. 23）。ゴロソフケルは更に、作品の「思想的プラン」と「物語的プラン」とを区別し、ドストエフスキーの思想的プランから見れば、カラマーゾフ老人の殺害者は「悪魔」に他ならない、と断定している（стр. 24）。

問題は、ここでドストエフスキーのいう「悪魔」とは何を意味しているか、ということである。

## 二

ゴロソフケルによれば、「悪魔」とは、互いに対立する両極的性格をもったイヴァンの否定的側面を象徴するものである。「悪魔によって象徴されるこの第二の側面」（стр. 34-35）は、「悪魔」の声を通して示されるイヴァン自身の傲慢な穢わしい一面を指しており、この否定的側面をもっている限り、彼は狡猾で卑劣な下僕スメルヂャコフとも一体なのである。「悪魔」やスメルジャコフは、「イヴァンの反響」であり、「彼の意識の完全に、あるいは（ドストエフスキーに従えば）部分的に、醜悪な塊」、「彼の一側面の代役俳優」なのである（стр. 42）。

したがって、イヴァンと「悪魔」との会話は、イヴァンの内なる「二重人の会話」（стр. 32）であり、彼の相対立する両側面の内面的対話である。彼は「悪魔」に向って次のように語っている。「お前は僕の幻覚なんだ。お前は僕自身の化身だ、しかし、ただ僕の一面の化身……一番けがれた愚かしい僕の思想と感情の化身なんだ。」（4,155）。「お前を罵るのは――自分を罵るんだ！」（4,156）。「お前はただ僕の穢わしい思想、ことに、馬鹿な思想ばかりとってるんだ。」（4,157）。

「悪魔」とは、イヴァンが罵り、心底から嫌悪し、否定しようとする「一番けがれた愚かしい」思想、「穢わしい思想」の象徴なのである。悪魔そのものが、まるで独立した実体であるかのように存在する訳はない。そのことはイヴァン自身が確言している。彼はアリョーシャに向って、「僕はね、あいつが実際あいつで、僕自身ではなかったら、ほんとうにありがたいんだがなあ！」と語っている（4,185）。ここでは、「あいつ」（悪魔）がイヴァン自身の思想ではなく、むしろ彼から独立した実体的存在であってほしい、という願望が述べられているが、このような非現実的願望は、悪魔自体といったものは全く存在しない、という確信を前提して出てくることはいうまでもないだろう。イヴァンはまた、このような願望的表現によるのでなく、明確な断定的表現によっても、悪魔の実在を否定しており、この問題に関する父親の問いに対して、「いえ、悪魔もいませんよ。」（1,271）と端的に答えているのである。

イヴァンが「僕の穢わしい思想」と名付けるものは、作品の具体的状況の中では、カラマーゾフ家の遺産相続の問題とからんで父親殺害を惹きおこすものであることは、「あなたは、お父さんが死ぬのを恐ろしく望んでいらしった」（4,137）とスメルヂャコフが指摘した場面での両者のやりとりからも推察される。その思想は、世俗的快楽を求め「生活に対する渇望にふるえている」（4,177）若者が、自己の欲望の満足のためには、どのような卑劣な手段や狡猾な方法をも弄することを辞さず、秘密の陰謀をたくらみ、公然たる暴

力や殺人をさえ敢行しようとする恐るべき内容のものである。この思想にドミトリーも一時とらえられたのである。彼は決して物理的に殺人を犯したのではないが、しかし彼もやはり快楽に充ちた「生活に対する渇望」のために父親への殺意を抱き、父親の屋敷に接した隣家の庭に秘かにしのび込んだのである。彼はそこへ偶然通り合わせたアリョーシャに、「おれはここで秘密に坐って、人の秘密を見張ってるんだ。」(1,206) と語っている。

ここで繰り返し出てくる「秘密」(секрет) という語にゴロソフケルは注目し、「神秘」(тайна)——この方は「肯定的な、深い、確信的な意味」をもっているという——と区別して、「何か否定的な、人に警戒心をおこさせるような、何か目配せするような陰謀を企てる悪賢いもの」が「秘密」の中に隠されている、と指摘している (стр. 24)。作品中において、「秘密」は「殺人、卑劣、盗み、裏切り、偽証、陰謀、嫉妬、思想および感情の混乱」と結合している、というのである (стр. 27)。

このような「秘密」と結合するイヴァンやドミトリーの否定的側面に対して、彼らの「神秘」すなわち彼らの肯定的側面が対立している。それは、イヴァンにあたかも天使のように清浄に見えるアリョーシャやその師ゾシマ長老と共通した側面であり、自ら法廷に出かけて真実を語り、自分の教唆に従ってスメルヂャコフが物理的に殺人を犯したことを告白しようと欲する「別の新しき人」である。それは、穢わしい思想を拒否し、受苦による自己浄化を欲するドミトリーの側面であり、後に彼を悔悛させ精神的再生をもたらした「復活せる人」である。

ゴロソフケルによれば、このような「新しき人」は、歓喜によって充たされ、静かな感動的な喜びへと到り、全てのもの全ての人に対して罪があることを認めるのであり、それはドミトリーの内面深くに蔵せられ、《餓鬼》のために、何の罪とがのない幼い受難者のために苦しもうと欲するのであるが、それのみならず、この「新しき人」は「明らかにイヴァンの内面にも閉じ籠められいる」のである。なぜなら、イヴァンもドミトリーに劣らず《餓鬼》の苦しみを共に感じ、罪なくして苦しんでいる幼い彼らのために《この世界を承認しない》のであり、未来の調和を拒絶しているからである (стр. 31)。

イヴァンの相対立した両極性は、彼の内面において激しく闘っている。それは、イヴァンを最後に狂気に陥らしめた程に強烈な矛盾的対立である。しかも、このようにイヴァンの人格を分裂にまで追いやったものは、決して精神病理学的な考察の対象としての心理的要因ではなく、「二つの敵対的な世界観の問題」(стр. 34) であり、哲学的な問題である。イヴァンは単に『カラマーゾフの兄弟』の舞台上で演じる一人の登場人物であるだけでなく、「思想の解決を望むような人物の一人」(1,165) であり、ゴロソフケルの表現によれ

ば、「思想家――カント的二律背反の弁証論的主人公」（стр. 34）なのである。イヴァンの思想の否定的側面を象徴する「悪魔」は、「非常に遠い秘かな隠れ場所の中に、カントの《純粋理性批判》の中に」（Там же）住んでいる、とゴロソフケルは見ており、カントが指摘した二律背反の「反定立」の中に、「悪魔の理論的基礎」（стр. 21）、すなわち「神と不死とがなければ、全ては許されている」という定式が隠されている、というのである。

ゴロソフケルによれば、二律背反的に対立する「定立」と「反定立」とが、『カラマーゾフの兄弟』における「名ざされざる主人公たち」（стр. 35）に他ならない。「定立」は神の存在、不死、意志の自由、物質的世界の有限性を肯定する主張から成り、「反定立」はこれらを真向うから否定する。ゾシマ長老、求道者アリョーシャ、精神的再生を経たドミトリーらは、定立の象徴であり、イヴァンの「穢わしい思想」、「悪魔」、スメルヂャコフなどは、反定立の化身である。定立と反定立とがこの作品の真の主人公たちであり、登場人物たちが演じる相剋のドラマは、定立と反定立とによって表わされる肯定的観念と否定的観念との対立を鮮明に示すのである。

定立を表現する登場人物ないし事柄として、次のものが挙げられている。ゾシマ長老、求道者アリョーシャ、神秘、讃歌「ホサナ」、歓喜、天使、高潔、マドンナの理想、復活せる新しき人など。これに対して、反定立を表わす人物ないし事柄として、次のものが対置される。大審問官、悪魔、スメルヂャコフ、神学生ラキーチン、秘密、恥辱、傲慢、ソドムの理想、「人神 человеко-бог」など（стр. 44）。定立の側は、自由、神、不死の観念に、反定立の側は、自然必然性、空虚、無際限、滅亡の観念に結びつくとされる。カントは、宇宙論的理念に関して、理性が可能的経験の限界を超えて抽象的な思弁に耽った時、不可避的に二律背反の状態に陥ることを指摘したのであるが、ドストエフスキーは、この定立と反定立との対立を文学的象徴と登場人物の中へ具象化し、経験的に展開されるドラマの舞台上で、集約的にイヴァンの思想的葛藤として肉化した、とゴロソフケルは主張するのである。

カントが指摘した思弁理性の二律背反とゴロソフケルがドストエフスキーの作品の中に読み取る二律背反とは、厳密にいえば、全く相違したものである。前者は、経験の地平を超出しようとする理論理性のア・プリオリな形而上学的思弁によって生じたものであり、後者は、具体的な経験可能の地盤の上で演じられる登場人物の思想的相剋を描くものである。この点の相違は、ゴロソフケルによって十分に自覚されている。彼は、カント自身が指摘した「純粋理性の二律背反」の内容を、彼が利用した Н. Лосский による露訳 «Критика листого разума»（Пг. 1915, 2-е изд. стр. 266-285）に従って提示し[6]（стр. 40）、それが、『カラマーゾフの兄弟』中に含まれる二律背反的事態と比べて、遙かに緻密な形而上学的思弁に

基づくものであることを告げている。

ゴロソフケルは、カントの「純粋理性批判の二律背反」の内容をそのまま引用し、カント自身がこの各主張の形而上学的内容に対して加えた厳密な批判的考察の跡を辿ることなく、ただ各主張の対立した形式的構造のみに注目して、これをイヴァンの思想的相剋の場に適用するのである。こうして、『カラマーゾフの兄弟』という小説に適用せられた「定立」と「反定立」の二律背反は、全く通俗的に簡略化され、次のような問いの形に定式化される（стр. 39）。

1　定立――世界は創造され、有限であるか？　反定立――世界は永恒で無限であるか？

2　定立――不死はあるのか？　反定立――不死はなく、全ては分割され引き裂かれるのか？

3　定立――人間の意志は自由なのか？　反定立――自由はなくただ自然必然性（自然法則）のみがあるのか？

4　定立――神、世界創造者は存在するのか？　反定立――神はなく、世界創造者はないのか？

以上、われわれは、カントとドストエフスキーとが触れ合う一つの接点を求めて、ゴロソフケルの見解を追ってきた。カントが『純粋理性批判』弁証論の中で考察した理論的先験論的問題が、ドストエフスキーの作品『カラマーゾフの兄弟』の中で「道徳と宗教との言葉」に移しかえられ（стр. 39）、読みかえられることによって極めて通俗化されていることは否定できないのであるが、しかしそれでも「定立」と「反定立」との二律背反的な対立構造の対応関係は、両著間に確かに読みとれるのである。われわれは次に、この対応関係を両著の比較によって具体的に考察したいと思う。（未完）

## 注

（1）Я. Э. Голосовкер, Достоевский и Кант, Размышление читателя над романом «Братья Карамазовы» и трактатом Канта «Критика чистого разума», Москва, 1963. 本稿中、стр. の略号を付して（　）内に記入したものは、全てこの書の頁数を示す。

（2）木下豊房氏による。ピエロタ、一九七二年十二月号、第十七巻、母岩社、八十頁。

（3）池長澄編著、現代倫理学――その系譜と課題――、昭和五十四年、杉山書店、第二章、自由と倫理（福島）、三十五頁――三十七頁。

（4）ゴロソフケルの著書に引用されている『カラマーゾフの兄弟』の原文は、編集者（責任編集者 Н. К. Гудзий）によれば十巻本選集（М. Гослитиздат, 1956–1958）に含まれるものである。筆者が、現在刊行中のアカデミー版三十巻ドストエフスキー全集の発刊以前から、利用しているものは、Ф. М. Достоевский, Братья Карамазовы, том I, II, YMCA-PRESS, Париж であるが、本稿での引用は、親しみ易い岩波

文庫版四巻（米川正夫訳）を拝借させて頂くことにする。ロシア文学には素人の筆者が、曲りなりにも原文を読み了えることができたのは、この訳書によって助けられたお蔭である。ここに感謝の意を表しておきたい。なお、この作品の引用頁は、本文中に巻数と頁数とを順に記入する。例えば、(4,178) とあるのは、岩波文庫版第四巻一七八頁を指している。

(5) I. Kant, Kritik der reinen Vernunft, Der transzendentalen Dialektik Zweites Buch Zweites Hauptstück Die Antinomie der reinen Vernunft. 本稿では Phil. Bibl. Bd. を利用するが、引用は慣例に従うことにし、第一版をA、第二版をBとして頁数を記入する。

(6) この露訳は、〔　〕内の追加を除いて、カントの原文とほぼ対応しているので、原文の方の頁数を付して提示しておく。

1　定立――世界は時間において起始を有し、空間に関しても限界づけられている。反定立――世界は〔時間において〕起始を有さず、空間において限界をもたない、それは時間に関しても空間に関しても無限である。(A 426, 427), (B 454, 455)。

2　定立――世界におけるいずれの複合的実体も単純な部分から成っている、一般に単純体のみが存在するか、あるいは単純体から合成されたものが存在するかのいずれかである。反定立――世界における複合物は単純なる部分より成立しない、一般に単純体は世界の中に存在しない。(A 434, 435), (B 462, 463)。

3　定立――自然の法則に従う原因性は、世界の諸現象が全てそれから導出されうる唯一の原因性ではない。現象の説明のためにはなお自由による原因性を想定することが必要である。反定立――いかなる自由も存在しない、世界における一切はただ自然の法則に従ってのみ生起する。(A 444, 445), (B 472, 473)。

4　定立――世界にはそれの部分として、あるいはそれの原因として、端的に必然的な存在者なるものが属している。反定立――絶対的に必然的な存在者は世界の内においても世界の外においても、一般に世界の原因として存在しない。(A 452, 453), (B 480, 481)。